

史上最強のヒーローが
悪役の私を離してくれ
ません～逃げようとし
たらぐちゃぐちゃにお
仕置きされて花嫁に
されちゃいました～

なぎさ

なぎさの妄想部屋

文庫版 / 体験版

序章 悪い子は、お仕置き

「ハーツハツハツハ！　くらえーっ！」

駅前広場の噴水を四本脚でまたいだ十七号機の、背中のタンクから、洗剤が噴き出した。よし、角度もポンプの圧も設計どおり。噴きあがった水が泡を巻きこんで、みるみる真っ白にふくらんでいく。

どうだ。明日の朝、掃除する人が泣くぞ。

「わ、泡だ」

「すごい。子どもが喜びそう」

……。

「く……っ、これでどう!？」

レバーを倒して噴出量を上げた。白い山が広場の敷石を埋めて、ベンチの脚が見えなくなる。ここまでやれば完全に迷惑のはずだ。

「うわ、これベタベタするやつだ」

「業者さん呼ぶことになるやつだよね、これ」

そう。そうだ。呼べばいい。

「どうだ！」

胸を張った。張ってから、ちよつとだけ考えた。悪役ランキング最下位のイリス様の犯行として、これはどうなんだろう。地味かもしれない。でも私のロボは人を傷つけない。そこだけは絶対に譲らないって決めている。……誰かに褒められたことは、一度もないけど。

「ハイハイ、ヒーローが来ましたよー」

広場の空気が、音を立てて裏返った。

「カシエルだ！」

「やったー写真写真！」

泡なんかも誰も見ていない。私のことはもっと見ていない。人垣の向こうで、背の高い男が爽やかに手を振っている。歓声がまた一段上がった。

日の下で、その髪が金色に光っている。こっちを向いた顔は、何度見ても腹が立つくらい整っていた。青い目に、笑うとやわらかくなる目もと。絵本から抜け出してきた王子様だと言われても、たぶん誰も疑わない。

そのくせ、装束の肩と胸には、王子様にはないはずの厚みがある。私が見上げてやっと目が合う背丈で、腕にも脚にも、鍛えた

ものがきれいに乗っている。

ぐう……っ、私と反応が全然違う……！

でも、それも当たり前だ。あいつは認可ヒーローのランキング一位で、本来こんな、泡がちよっと出たくらいの現場にふらりと来る人じゃない。地球がひっくり返るような日にやっと動く、そういう格の人。

……はずなのに。私が悪さをすると、かならずあいつが来るのだ。

(どうなってんの……？ 暇なの？)

「はい、危ないからみなさん避難してください」

「えー？ 全然危なさそうじゃないけど、こいつ」

失礼な……！

「僕の力加減が約束できませんから」

にこにこ顔のまま、あいつがそう言った。

「そりやそうだ」

「邪魔になるといけないし帰ろう」

みんな素直に納得して帰っていく。私の襲撃では一度も避難してくれなかったのに。

泡の弾ける音だけになった広場で、二人きりになる。

「く、くるな！ 変態！」

「ひどいなあ。トップヒーローに向かって変態なんて」

「事実でしょ！ ばか！ 近寄らないで！」

十七号機のアームを振り下ろす。渾身の一撃。

パシッ、と乾いた音がして、アームは彼の手のひらに収まって

いた。片手で、だ。鋼材の塊を、飛んできたボールでも受けるみたいに。

そのまま、くい、と軽く手首を返される。たったそれだけで、アームごと前脚が浮いて、車体全体が向こうへ傾いた。何百キロあると思ってるのよ——と、考える間もなかった。高い操縦席から、空いたほうの手が私だけを掬い上げる。

「ひゃっ！」

背中が広い胸にぶつかって、逃げ道が消えた。腰に回った腕は、力を入れている感じすらしない。この人はいつもそうだ。私の全力を、片手で受け取って終わらせる。

「悪い子は、お仕置きしないと。ね？」

「や、やだあ、やめてえ……♡」

「ダーメ。こういうのはちゃんとしないと」

つなぎの布ごしに、大きな手が胸を包んだ。探るように動いて、すぐに先を見つけられる。

「ひ、ちよつと……っ！」

「ここ、もう起きてるね」

「やだってば、あ、コリコリするのは、やだ！」

「じゃあ、どうするのがいいの？　こうやってキュツとすること？」

「ひんっ♡　それも、だめえ！」

「ワガママさん。じゃあ、こうしよう」

じ、とつなぎのファスナーが下ろされて、下着を上になぞらされる。ぷるん♡と外気に触れた胸が、勝手に揺れた。

「あ、こんなところで……！」

「大丈夫、近くに人、誰もいないから。きたらすぐわかるよ、僕は」

「だからってえ……」

「ハイハイ」

そのハイハイで全部済ませるのやめてほしい。泡の弾ける音がぱちぱち鳴っているだけの広場で、私の胸だけが外に出ている。さつきまで人でいっぱいだった場所だ。

キュッ♡と直接つままれて、尖った先を爪でカリカリッ♡といじめられる。

「ひ、ひあ……それ、だめえ……♡ カリカリ、しないでえっ♡」

「ダメなことじゃないと、お仕置きにならないよね？ ん？」

両方を軽く引っぱられて、そのまま、またカリカリッ♡

「あ、あ、あ♡」

（爪、だめ、そこ引っぱりながらされるの、一番だめなの♡ おまんこがきゅうん♡ ってなっちゃうのっ♡）

「どうして欲しい？」

耳元で囁かれた声が、うなじから背骨に落ちていく。

「意地悪！ 最っ低！」

「ん？ なんて？」

キュッ♡ ぐりっ♡ ぐりっ♡ ぐりっ♡

「あふっ♡ ばかばかっ！」

指の腹で押しつぶされて、離される。またつままれて、こりこり♡と転がされる。

「んっ♡ あ、あんっ♡ や、また、それえ……っ♡」

同じことを、飽きもせず何度も。そのたびに膝から下がぐずぐずになっていく。

（乳首だけなのに♡　なんでこんな、下がじゅんじゅんしちゃうの♡　絶対染みてる、絶対バレてる♡）

「かわいい声出るようになったね、イリス」

「ちが……っ♡」

「違う、じゃないよね？　本当は？」

「ふう、ふう……っ♡」

言わなくても、彼に散々教えこまれた身体は、私が口を閉じている間も全部喋ってしまったている。膝が笑って、腰の奥が重い。

「ここ、虐めてほしいんでしょ？」

もう片方の手がするりと下りてきて、つなぎの上から、ちょうど場所をコリッ♡と撫でた。

「ひう♡　そ、こお♡」

「ここ、どうして欲しい？」

「いいたくないっ♡　ふああ……っ♡」

「ぷくっとして、いじめてゝって言ってるのになあ……素直じゃないところも、かわいいけど」

「ん、ふう……♡」

「そうやって強がっていると、もっといじめたくなるよね」

胸の先をいじる手はそのままに、下にいた手が、しゅる、と手袋を抜き取った。

「う、ひ……！　ちよつ、ん、ああ……っ♡」

素手になった指が下着の中に忍びこんできて、ぬるゝ♡と周りをなぞる。周りばかりだ。一番触ってほしいところは、避けて通られる。

（そこじゃな……っ♡ もうちょつと、まんなか♡ やだ、なんで避けるの、絶対わざとだ、こいつ……♡）

ぬりゅ♡ぬりゅ♡と、いつまでも焦らすみたい撫でまわされる。その度に避けられた場所がじんじん熱くなっていく。

理性が、飛んできた。

「ふ、ん、うゝ……♡ カシエル、おねがい……♡」

「何を？」

「——ッ♡ クリ、触ってえ……♡」

「ふふ。どうやって？」

「ひどい、よお……!!」

「君の口から聞きたい」

くにくに♡と、押しつぶすみたいに刺激される。芯の上を、皮ごしにゆっくり。

もう、ダメだった。

「おねがい、します……♡ クリ、指でくちゅくちゅして、いじめてください♡」

「はあ……♡ クッソかわいいな……ほら、イケよ」

「ひあ♡」

いつもの柔らかい喋り方が、一瞬だけ剥がれて、ひっくい雄の言葉が落ちてきて——それだけで、お腹の奥がまたキューン♡と
してしまった。

指の動きが変わる。コスコスコス♡と、一番敏感な先っぽだけをピンポイントでこすられた。散々焦らされたそこは待っていた刺激を一気に拾って、気持ちよさがあつという間に高まる。

「あっ♡ あっ♡ それ、くる、きちやう……ほ、おお♡ イ
クイクツ♡」

腰が跳ねる。膝から力が抜けて、腕の中に体を預ける形になる。「はい、まだだよー。おまんこのお汁しっかりつけて、くちゅくちゅしようね」

「あひっ♡」

滴るほど出ていたものをたっぷりすくい取られ、ぬちゅぬちゅ♡と塗りつけられる。滑りがよくなったそこを、今度は高速で上下に何度も可愛がられた。

（イッてるのに♡ まだされてる♡ こすられてるの全部聞こえちゃう、くちゅくちゅっついていやらしい音出しちゃってる……♡）

「あ、イク……♡ イグのおお♡」

ビクッビクッ♡と全身が震えて、達してしまった。倒れる前に、しっかりと抱きとめられる。

「はあ、ふう……♡」

「ん、かわいかった」

ちゅ、と後ろから顎を掴まれて、甘くキスされる。

「ん……♡ ふ……♡ ん……♡」

コツンと額を合わせられて、色っぽい声で囁かれる。

「ね、このあと、僕んちおいで？ もっと可愛がってあげるから」

「や、やだ。絶対やだ」

「なんで？ 歓迎するよ」

「あんたの歓迎は怖すぎるの！」

「そうかなあ……もつと気持ちよくなれるのにね」

「それ！ それがだめ！」

くすりと笑われた。笑い事じゃない。

「まあ、考えといてよ。いつでも待ってるから」

本当におかしい。この街で一番強くて、一番人気があつて、みんなの味方をやっている男が、悪役ランキング最下位の私のところにだけ、毎回こうしてやってくる。

……なんでこんな事になったかというと。

始まりは、私が家を飛び出した日まで戻る。

一章 今度から僕に見せてよ

「メカなんかやめろ」

親にそう言われた日のことは、いまだにそっくりそのまま思い出せる。工具の音がうるさいとか、油の匂いが家中に移るとか、そういう話から始まって、最後には必ずそこに落ちた。女の子がやることじゃない。食べていけない。みつともない。

昔から、要領の悪い子どもだった。言われたことを言われたとおりにはやるのが下手で、教室では大体、笑われる側。友達づきあいも上手じゃなかった。

そんな私が唯一、息ができたのが、ひとりで何かを組み立てている時間だった。

今でも覚えている。拾い集めた部品で、初めて簡単なイヌのメカを作った日のこと。かくん、かくん、と不格好に歩いたあれが、自分の手の中で動き出した瞬間のこと。人生で一番、嬉しかった瞬間。

それからもう、そればかりだった。なんでそんな変わったことを、と呆れられて、教室での居心地はもっと悪くなって、それでも、やめられなかった。他のことは軒並みだめで、興味も湧かなかったのだ。

——普通で、いられないの？

言われた中で、一番堪えたのはそれだった。なんで、大好きなことを諦めるほうが「普通」なんだろう。でも、まともな就職先がないのは事実だった。専門学校に行きたいと言ったときは、お

金の話をされて、終わった。

それでも、諦めきれなかった。

言いたいことはたくさんあったけれど、全部飲みこんで、私は工具箱と自分で貯めたお金だけ持って家を出た。育った地域から、電車を乗り継いで遠くまで。

大成してやる、と思っていた。誰が見ても文句のつけようがないくらい、すごい活躍をして、あの家に見せつけてやるつもりだった。

それで、悪役になった。

先に、この街の仕組みを説明しておく。

この街には「職業ヒーロー」がいる。協会の認可制で、悪役や

災害を派手に解決するほど中継が回って、スポンサーがつく。要するに、正義がひとつの興行になっている街だ。

対して悪役のほうは——名乗って暴れれば、その日から悪役。もちろん犯罪だ。でもこの街では、悪役は昔から「腕試しの登竜門」でもある。ヒーローを一人でも負かせば、それだけで実力の証明になって、大手の企業や警備会社からスカウトが来る——らしい。だから毎年、腕に覚えのある連中が悪役を名乗って街に出るし、ヒーロー側もそういうのを華々しく討伐して、名を上げて、スポンサーを増やす。持ちつ持たれつの、興行みたいな街。

笑われそうだから先に言っておくけど、私はちゃんと考えた。

認可の要る発明家の道は、後ろ盾も学歴もない人間には最初の扉すら開かない。でも悪役なら、明日からでも自分のロボを実戦に

出せる。人の目に触れる。動いているところを見てもらえる。

ヒーローに勝てば、それが実力の証明になる。スカウトが来れば

——家を見返してやれる。

決めたことは、ひとつだけ。人を傷つけないこと。悪役でも、そこだけは絶対に譲らない。

——我ながら、完璧な計画だと思っていた。

現実には、悪役ランキング——協会が脅威度で公表している番付だ——の、文句なしの最下位だった。

華々しい連中はいくらでもいる。街ひとつ揺るがすような悪役も、それを真正面から殴り倒すヒーローもいる。中継が入って、翌日の広告に写真が載って、みんながその話をする。

私の現場に来るのは、協会の下っ端が二人。書類を片手に「はい、じゃあ撤収お願いしますねー」で終わり。中継どころか、通行人すら立ち止まらない。一度、犯行声明を三日前から出しておいたのに、当日の観客が猫だけだったこともある。

トップの噂だけは、嫌でも耳に届いた。認可ランキング一位の、カシエルとかいうヒーロー。どんな悪役でもほぼ一撃で、本来は地球がひっくり返るような日のために取ってある、規格外が存在なんだとか。撤収に来る協会の下っ端まで、書類をめくりながらうつとり語っていた。

ふうん、と思って、聞き流した。雲の上の話だ。ランキングの一番上と一番下じゃ、同じ制度の中にいるというだけで、一生す

れ違うことすらない。私に関係のある噂じゃない。顔を覚える必要も、ない。

——それがどういう結果を招くのか、思い知るのはもう少し先の話だ。

住まいは街外れの貸しガレージ。シャッターを開ければそこが工房で、奥のパイプベッドが寝床だ。冬は寒いし、油の匂いは服から抜けない。あの家では散々嫌われた匂いだけど、ここでは誰も文句を言わない。それだけで、私はけっこう平気だった。

誰にも見てももらえない日が続いても、私はガレージに帰って、また作った。次はもっと関節を軽くする。次は出力の逃げをなくす。次こそ。

……本当のことを言うと、そのころにはもう、夜中にふっと嫌な考えが顔を出すようになっていた。作っても、勝てない。誰も見ない。親の言うとおり、私には無理なんじゃないか——って。

あの日持ち出したのは、その嫌な考えを力ずくで黙らせるために作った一台だった。三号機。ガレージの天井すれすれの二腕型で、腕の可動域を三倍にした自信作。設計にひと月、組みに二週間。家を出てから作った中で、初めて「これなら勝負になる」と思えた一台だ。関節をひとつ組み上げるたび、あの家で言い返せなかった言葉を、ひとつずつ埋めこむみたいにして作った。あとは、実戦のデータだけが欲しかった。

現場に選んだ川沿いの広場には、先客がいた。

人だかりの真ん中で、背の高い男が写真を撮られていた。装束を見ればわかる。ヒーローだ。名前は知らない。顔も知らない。私の頭の中は設計図でいっぱい、ヒーロー図鑑を眺める余裕なんてなかった。なにしろ、噂の一位様の顔すら知らないのだ。あとは推して知るべしである。

——ちようどいい。

悪役の実績は、ヒーローと戦ってこそ数字になる。写真を撮られてるってことは、そこそこ人気があるんだろう。相手にとって不足なし。むしろ格上げのチャンスだ。

「ハッハッハッハ！ そのヒーロー！ 私と勝負しなさい！」
人だかりが、一斉にこつちを見た。

悲鳴が上がると思った。上がったのは、ざわめきだった。

「え……？ マジかよ」

「嘘でしょ。正気？」

なんだろう、この空気……。悪役がヒーローに挑むのは、当たり前のことなのに。

当のヒーローは、きょとした顔で自分を指差した。

「……僕に？」

「あんた以外に誰がいるのよ！」

「まあ、そうだね」

男が手を振ると、人だかりは慣れた足取りで下がっていった。避難、というより観客席への移動に見えたのは気のせいだと思いたい。広場の真ん中まで歩いてきた男は、噛みしめるみたいと言った。

「すぐく久しぶりだな、こうやって挑んでこられたの」

「おしゃべりは、おしまい！　いくわよ、三号機！」

アームを振り上げた。全力の初撃。

視界から、男が消えた。次の瞬間には目の前にいて、拳が振り抜かれていて――

三号機が、真ん中から折れた。

「ひゃんっ！」

操縦席ごと投げ出されて、私は地面に転がった。痛みより先に、視界の中で自分の一台がばらばらになっていくのが見えた。関節が、腕が、ひと月かけた設計が、部品の山になって道路に散らばる。

背の高い男が、埃の中で手を払っていた。にこにこ人の子さ

そんな顔で、こっちを覗きこんでくる。

近くで見て、はじめて気づいた。金色の髪に、青い目。埃だらけの道端にいるのが場違いなくらい、顔がいい。その姿で、私のロボを壊した手の埃を払っている。

「どうする？ 続ける？」

あまりにも、軽い言い方だった。

勝負になると、思っていた。この一台なら、と。……その一台が、たった一発で、道端の鉄くずになった。

——やっぱり、私には無理なんじゃないか。

夜中の嫌な考えが、答え合わせみたいに降ってきた。壊れて転がっているのが、機体だけじゃない気がした。

そこで、決壊した。

「……ひどい」

「え？」

「ひどい……っ、私の、大切なロボを！」

みつともないのはわかっていた。悪役が泣くなんて聞いたことがない。でも一度こぼれたら止まらなくて、私はばらばらになった三号機の前に座りこんで、子どもみたいに泣いた。

男が、あきらかに固まった。

「ご、ごめん」

謝られた。

ヒーローに。壊した側に。

しゃがみこんだ男は、転がっていた腕の部品を拾い上げて、しげしげと眺めた。

「これ、君が作ったの？」

「……そうだけど」

「へえ」

馬鹿にした響きは、なかった。

「どこで習ったの、こういうの」

「習ってない」

「独学？」

「……悪い？」

男は答えないで、折れた関節の断面をしばらく見ていた。それから、指先で軸受けのあたりをつついた。

「ここ、ずいぶん凝ってるね」

その一言で、決壊した涙とは別のものが決壊した。口が勝手に

動いた。

気がついたら、全部喋っていた。ロボが作りたくて悪役をやっていること。正規の道は自分には無理だったこと。ランキングが最下位なこと。このロボにひと月かけたこと。誰も見に来ないこと。

男は口を挟まなかった。ときどき部品をひっくり返ししながら、最後まで聞いて、それから言った。

「そっかあ……」

その相槌が、あんまり静かだったから、私はやっと自分が何をしているのか気づいた。

……なんで私、こんな話してるんだろ。

大きな手が伸びてきて、ぽん、と頭に乗った。

「今度から僕に見せてよ、君のロボ」

「は？」

「新しいの作るんでしょ」

「作るけど……ヒーローがなにいつて……」

「そのヒーローに身の上話聞かせてるの、君だよ？」

「う……」

返す言葉がなかった。男は満足そうに立ち上がって、埃だらけの膝を叩いた。

「ま、今度からそうなるから」

「なにそれ、勝手に——」

「あ、名前は？」

「……イリス」

「イリス、ね。覚えとく」

そのまま、その男は行ってしまった。名乗りもせずに。

残された私は、三号機の残骸をかき集めて台車に積んで、ガレージに帰った。直すことも考えた。考えて、部品代の採算を弾いて、泣く泣く諦めた。それでも残骸は、どうしても捨てられなくて、ガレージの奥に布をかけて置いた。

腹が立っていたし、悔しかったし、それなのに、頭に乗った手の重さだけがいつまでも消えなかった。

このときの私は、まだ何も知らない。あの男がこの世界で一番有名なヒーローだということも、あの日から私の現場に来るのが、二度と協会の下っ端ではなくなることも。

二章 立場わかつてる？

次の現場にあの男が来た。その次も来た。その次の次も、季節が変わっても、雨の日でも来た。毎回あの背の高いのが降ってきて、「おやおや、また君か」と笑って、私の新作をあつさり止める。四号機の時きだった。ビルの三階まで届く長腕が自慢の、うちで一番背の高い一台。

伸ばしたアームを片手で受け止められたと思ったら、軽々と跳躍した彼は、もう片方の手の指を、根元のあたりに軽く当てた。かこん、と気の抜けた音がして、四号機の腕から力が抜けた。壊れては、いない。

「……え？」

「これ、壊さないで止めたほうがいいでしょ。直すの君だし」

言いながら、彼は力を失ったアームを支えて、ゆっくり地面に下ろした。部品ひとつ落ちなかった。

「……今の、どこ押さえたの」

「ここ。無理な力がかかったら、自分から抜けるようにしてあるでしょ。先に抜いただけ」

心臓が、跳ねた。人に当たったときアームが踏ん張らないための逃がしだ。

「……なんで、そんなのわかるの」

「見ればわかるよ。……それより、伸ばしきったとき。あそこに全部の力が乗るよね」

「それ、そういう構造なの。可動域を稼ぐために」

私はその場でしゃがみこんで、油まみれの手で地面に図を描いた。彼もしゃがんだ。ヒーロー装束のまま、汚れるのも気にもせず。

日が傾くまで話していた。

こんなふうにはロボの話ができる相手は、今までひとりもいなかった。親も、部品屋の店主も、協会の下っ端も、私のロボを「邪魔なもの」か「大したことはないもの」のどちらかでしか見なかったのだ。

だから、気づくのが遅れたんだと思う。

「カシエルだ！」

「握手して！ 握手してください！」

七号機の日、集まった人だかりの声で、私はやっと気がついた。

「ハイハイ、危ないから下がってくださいーい」

いつもの一言で、人垣はあっさり引いていく。遠ざかる背中を見送ってから、私はやっと声を出した。

「あ、あんたって……！ トップヒーローのカシエルだったの？」

「うん、やっと気づいた？」

「なんっ……なんで、私なんかの担当を？」

認可ランキング一位が、悪役ランキング最下位を担当する。そんな話は聞いたことがない。彼はちよつと考えるふりをして、それからあっさり言った。

「好きだから」

一瞬、耳がおかしくなったかと思った。

「う、うそつき！ 信じないから！」

「じゃあ、信じてもらえるように頑張るよ。いろいろと」

いろいろと？　の中身を聞く前に、影が近くなった。

「え、」

顎に、指がかかった。親指が輪郭を確かめるみたいに滑って、くい、と上を向かされる。まつげの一本一本が数えられるくらい近くに、あの顔があった。

「ちよ、まつ——」

唇が、重なった。

やわらかい。熱い。自分の心臓の音がうるさすぎて、他の何も考えられなくなった。往来の音が遠くなる。人の消えた路上で、真っ昼間で、ここは現場で、私は悪役で——そういう言い訳が、順番に溶けて消えていく。

角度を変えて、もう一度。下唇をやわらかく食まれて、膝から力が抜けかけたところを、腰に回った腕に支えられた。それでやっと、自分がいつの間にかつま先立ちになっていたことに気づいた。

離れていくとき、唇が、ちゅ、と名残惜しそうな音を立てた。

「……っ、な、なな、」

「はじめて？」

「……っ!!」

図星だ。だからこそ何も言えなかった。彼はしばらく私の真っ赤な顔を眺めて、それは嬉しそうに目を細めた。

「かわいい」

顔から火が出るかと思った。

その日から、彼の「いろいろ」が始まった。

最初は、手を握られるだけだった。次に、撤収のたびに抱き上げられるようになった。頬に、額に、こめかみに、挨拶みたいなキスが増えた。そして——九号機の日。

その日の一台は、キャタピラの台車に太い腕を二本生やした、うちの歴代最重量機だった。車体の上の操縦席は、経費節約のため屋根も扉もない、パイプフレームだけの吹きさらしだ。

止められて悔しがっていたら、履帯を踏んで上がってきた彼に、背もたれの向こうから腕を回された。大きな手が、つなぎの上から、胸をすくうように包む。

「ひゃっ！　ちよつと！」

「ん？　どうしたの？」

「どうしたの、じゃない！　いま、揉んだでしょ！」

「そうかなあ」

しらばっくれたまま、手はどく気配がない。指が、形を確かめるみたい ゆっくり沈む。

「し、しらばっかれて……ヒーローがそんなことしていいの!？」

「トップヒーローだからね」

「はあ!?　そんなの言い訳にならないから！　卑怯者！」

「うーん」

彼は本気で考えるみたいに首をかしげて、それから、少し困ったように笑った。

「なんか、イリス相手には手段を選ばなくなっちゃうんだよ。不

思議と」

「な、なにそれ……怖い……」

すつと、顔が近づいた。

「いっそ、僕のになってくれたら——卑怯なことなんかせず、君を思いつきり可愛がれるんだけど」

「意味、不明……！ あっち行って、ばか！」

「やだ」

即答と一緒に、つなぎのファスナーがジーツと下ろされた。

「あっ♡」

下着を上にならずらされて、こぼれた胸を手で包まれる。外気より熱い手のひらの真ん中で先端が擦れて、自分のものじゃないみたいな声が出た。

「ん、あ……っ♡ や……っ♡」

「いま、かわいい声でたね」

「な、でてない！」

「ここ、弱いんだ？」

見つけたばかりの先っぱを、指の腹で、くり♡と転がされる。

「ひゃんっ♡ よわくな……っ、んんっ♡」

「ふうん？　じゃあ、これは？」

きゅ、と軽く摘まれて、引っぱられて、離される。ぷるん♡と揺れたそこを、今度は手のひら全体で、ゆっくり円を描くみたい
に可愛がられる。

「ふ、あ……っ♡ ん……っ♡ あ、あんっ♡」

触られている場所から、じわじわと知らない熱が湧き上がって

くる。

「や、やだ、なんか、へん……っ♡」

「変じゃないよ。上手」

「なにがあ……っ♡ ひあっ♡」

両胸の先を、同時にこりこり♡と転がされた。腰の奥の、覚えのない場所がきゅうつ♡と縮む。膝が笑う。操縦席の縁を掴んだ手に、力が入らない。

「ん、っ♡ ふ、う……っ♡」

「声、我慢してるの？ かわいいね」

「し、してな……あんっ♡ ふ、う……っ♡ く、うん……っ♡」

奥歯を噛んでも、鼻から抜ける声までは殺せなかった。

どのくらいそうされていたのか、わからない。胸しか触られて

いないのに息が上がって、目尻に涙が滲んで、つなぎの中で下着が大変なことになっている。

「はい。今日はここまで」

ぽ、と手が離れた。

「ふえ……？」

支えを失った身体が、へにゃっと操縦席に沈んだ。力が入らない。胸の先がジンジンして、それより下が、もっとジンジンしている。変だ。私、どうしちゃったんだろう。

「僕のものになったら、もっと気持ちよくしてあげるよ？」

耳のすぐそばで、息を吹きこむみたいに囁かれた。

その瞬間、とぷっ♡と。奥で何かがこぼれたのが、わかってしまった。

「ひ……っ」

「どうかした？」

見上げた彼は、にこにこしていた。全部見透かしているみたいな、笑みだった。

「な、なんでもない！ 帰る！ 撤収！」

「じゃあ、送ってあげる」

「え？」

彼は動かなくなった九号機の履帯の下に手を入れて——私が縦席に乗ったままのそれを、軽々と持ち上げた。総重量二トン。見上げるほどの車体を、片手で。

「ちょ、ちょっと!？」

「しっかり掴まってね」

ふわ、と浮遊感が来て、街が沈んだ。

風の音。流れていく屋根。操縦席のフレームにしがみつきのながら、私は悲鳴も忘れて彼の横顔を見た。二トンを素手で持って、人を乗せたまま、跳んでいる。息ひとつ乱れていない。

（どうなってんのよ、こいつの身体……!?）

ガレージの前に降り立った音は、拍子抜けするほど静かだった。九号機を下ろす音より、シャッターの揺れる音のほうが大きかったくらいだ。

「はい、着いたよ」

「……ど、どうも」

「こんなところ、女の子がひとりで住む場所じゃないと思うけどなあ」

余計な事をばやきながら、彼は九号機の置き位置を几帳面に直して、それから私の頭に、ぽんと手を乗せた。

「またね、イリス」

次の跳躍で、彼は屋根の向こうに消えた。

私はガレージの前に立ったまま、その放物線を、馬鹿みたいに口を開けて眺めていた。胸の先が、まだじんじんしていた。

——そう。そうやって、あの泡だらけの広場の日まで来る。

「僕んちおいで？」を断って、へたりこんだ膝を自分で叩いて立ち上がって、私はガレージに帰った。帰って、また新しいメカを作った。それが——まずかった。



次の新作は、ロボじゃなかった。

自分の身体に着る、強化フレーム。腕と脚に沿わせた外骨格が筋力を補助してくれる、要するに「着るパワーアシスト」だ。これさえあれば、非力な私でも重い資材を素手で運べる。悪役活動の幅が、ぐんと広がる。

——はずだった。

決行場所は、いつもの駅前通り。案内標識をこっそり動かすという、我ながら地味の極みみたいな悪事の途中だった。

フレームの膝が、がくん、と勝手に沈んだ。

「え、ちよっ」

制御が暴走した。補助どころか、フレームが私の身体を勝手に動かしはじめる。膝が折れ、両脚が左右に開いていく。逆らおうにも、筋力を補助するための出力は、当然、私の筋力より強い。

がしゅん、と音がして、フレームは固まった。

道の真ん中で。両脚を大きく開いて座りこんで、腰だけ浮かせた、およそ人様に見せられない姿勢で。

「……なにあれ」

「新しい芸？」

通行人が、足を止めはじめた。くすくすという音が、さざ波みたいに広がっていく。誰かがスマホを構えるのが見えた。

「み、見るな！ 見るなー！」

慌てて腕で隠せるところを隠したけど、開ききった脚そのもの

は、どうやっても隠しようがない。

叫べば叫ぶほど、笑い声は増えた。悪役として恐れられないのはいつものことだ。でも、笑われるのは、恐れられないのとは全然違った。目の奥が熱くなって、それが余計に悔しくて、私は唇を噛んだ。

影が、太陽を横切った。

着地の音は、いつもよりずっと静かだった。

「避難してください」

いつもの「ハイハイ、ヒーローが来ましたよー」じゃなかった。短い一言なのに、通りの空気が一瞬で冷えた。笑い声が止まる。スマホが下がる。

「え、でも、危なくな——」

「避難してください」

同じ言葉を、同じ高さで繰り返したただけだった。それだけで、人だかりは黙って散っていった。

通りから、人が消えた。

物音ひとつしなくなった往来の真ん中に、変な格好で固定された私と、こっちに背中を向けたまま立っている彼だけが残った。

「た、助けてよ……」

いつもなら、ここで「おやおや」が来る。また？と笑って、それからさんざん揶揄って、悪戯して、結局助けてくれる。

それが、なかった。

「立場、わかってる？」

（あれ……？ 今日なんかな……）

いつもの、語尾のやわらかい喋り方じゃない。冷たく平らかな声だった。

「ど、どうしたの？」

彼が、ゆっくり振り返った。

いつもの胡散臭い笑みがない。あれがないと、別人みたいに冷たく見える。整った顔だけに。

それが一歩ずつ近づいてくる。靴音が、誰もいない通りにやけに大きく響いた。

「こんな格好、他人に晒すなよ」

ぞくり、と背中が鳴った。低い。ときどき一瞬だけ剥がれて落ちてくる、あの声だ。

「な、何であんたにそんなこと……」

言い終わる前に、目の前に立たれた。

見上げるしかない体格差が、今日はいつもより大きく感じた。彼は何も言わずに、開いたまま固定された私の脚を見て、それを隠そうと空回りしている私の手を見て、最後に、顔を見た。逃げたいのに、フレームは動かない。

何も言えずにいると、彼は長い息をひとつ吐いた。ため息とも違う、何かを抑えこむみたいな息だった。

「お前は……」

顎を掴まれた。

親指が、確かめるみたいに顎の線をなぞる。目が合う。近すぎる距離で、その目の奥に何かが燃えているのが見えた。

「俺のだろ？」

——俺？

驚いた。この人が自分をそう呼ぶのを、初めて聞いた。

違う、と言えはいいのに、喉が動かなかった。否定したら大変なことになる、という予感のほうに先に来たからだ。

低い声のまま、彼は続けた。

「……本当は、このまま腕の中に閉じこめておきたいくらいなのに。こんな格好、他のやつに見られたと思うだけで——気が狂いそうだ」

閉じこめて、おきたい。聞き間違いであってほしい言葉が耳に入って身体が固まった。

「なあ。俺が毎回、どんな気持ちでお前を見てると思う？　考えたこと、ある？」

「ど、どんなつて……」

この人が考えてることなんて、いつだって、何ひとつわからない。

彼は目を閉じて、ゆっくり息を吸って、吐いた。

もう一度目を開けたときには、いつもの彼に戻っていた。

「とにかく、自分に使うようなものは、僕が来てからにして。いい？」

「う、うん、わかった……」

そう答えるしか、なかった。

「ん。じゃあ、お仕置き」

「え？ 今日も、するの？」

「当たり前。このままするから」

「うそ、こんな格好で!？」

「だからいいんでしょ？ しつかり反省してもらわないと」

「ひ、やだやだ！ ばか！ 変態！」

つなぎのファスナーが、下まで一気に下ろされる。

「ひ、っ！」

とっさに、彼の手首を両手で掴んだ。止まらなかった。押しても引いても、鉄骨を掴んでいるのと変わらない。結局私の両手は、行き場をなくして、彼の袖に縋りつく形になった。

「わ。もうこんなになってる」

「なってな……っ」

下着の上を、指の腹がすうっとなぞった。布はもう、ぴったり張りつくくらい湿っている。

「いつもは閉じちゃうのにね。今日は閉じられないんだ」

脚は誘うみたいに大きく開いていて、閉じられない。恥ずかしさで、耳の先まで熱くなった。

下着をずらされて、外気が直接あたる。

「ひゃあ……っ♡」

「ここも、外に出ちゃったね」

「い、言わないで……っ」

手袋を外した彼の指が、まずクリの上にトン、と置かれた。

こりっ♡

「ひゅっ♡」

皮ごしにゆっくり回されて、腰が跳ねようとして、けれど足が固定されているから逃げ場がない。

「逃げられないのは、いいね。僕の好きにされても抵抗できない」
「よくないっ、全然よくない……ひあっ♡」

こりこり♡ こり♡ こりこり♡

同じ場所を、飽きもせず、しつこくしつこく扱かれ続ける。

「あ、あっ♡ やだ、それずつとしてるの、やだあ♡」

「ずつとしてほしくないの？ じゃあ、こっち」

もう一方の手が、下へ忍びこんだ。指先が入口を撫でて、その
まま一本、ぬぷ♡と沈む。

「んうっ♡」

「うわ、すごい。ぎゅうって締めてる。もつとぐちゅぐちゅして
ほしいんだ？」

「言ってな……っ、あっ♡ そこ、だめっ♡」

指がお腹側の壁を探り当てて、そこだけを狙ってぐりゆぐりゆ
♡と押し上げてくる。上ではクリをこりこり♡と転がされたまま。
二つが同時に来ると、頭の中が空っぽになる。

（ナカとクリ、一緒にされたら無理なの知ってるくせに♡　ぐり
ぐりされて、じゅぶじゅぶ言ってるの外に聞こえちゃう♡）

「ひ、ああっ♡　両方、やだあっ♡」

「好きなくせに、何言ってるの？」

「もうっ、わかった、わかったからあ……♡」

「なにが？」

「じ、自分には、も、かつてに使わないからっ……♡　ごめんな
さ……ひあっ♡」

「うん、そうだね。でもお仕置きはしないと」

指が増えた。二本になって、ぐちゅ♡ぐちゅ♡と音が大きくなる。

「ひ、あっ♡ ゆび、ふやしちや、やだ……っ♡ あっ♡ あっ♡」

手首ごと使って揺すられて、上のクリは指の腹で押しつぶされ
たまま、細かく細かく振動させられる。

腰の奥に、気持ちいい感覚が集まってくる。

「あ、あ、あっ♡ くる、それきちやう♡」

「うん、いいよ。ほらイッて」

「ひ……っ、あぁあっ♡♡」

ぐちゅう♡とひととき強く押し上げられた。固定された足の
先まで力が入って、爪先が丸まる。ナカが指を締めつけているの

が、自分でもはつきりわかる。目の前が白く滲んだ。

（イッてる♡ 真っ昼間の道の真ん中で、自分のメカに開かされたままイッちゃった♡）

それだけじゃ、止まらなかった。

「ひっ、ま、まって、いま、いまイッて……っ♡」

「うん、わかるよ。ここ、さっきからずっとひくひくしてるもんね。イキながらされるのも、好きだろ？」

「あっ♡ あっ♡ だめ、いま触られたらあ♡」

達したばかりのクリを、今度は休みなくこすられた。ぬるぬるになった指が、一番敏感なところをコスコス♡と往復する。

「ひああっ♡ しゅごい、しゅごいのお♡」

「じゃあ、このまま、もっともっとイこ？」

「い、や……っ♡」

「はい、もっかい」

ナカの指が、さっきの場所をまた押し上げた。上と下から挟まれて、絞られるみたいに、二度目が来る。一度目より速い。

「んおっ♡　でる、でちゃう♡　やだ、でちゃうからあ♡　イク、イク♡♡」

「出していいよ、ほら」

ふしゃ♡と、股のあいだが濡れた。自分の脚を伝う感覚があつて、それが恥ずかしくて、恥ずかしいのにまた奥がきゅうっと閉じた。

「ひ、あああ♡　謝ってるのに……♡」

「まだ、ダメ。ちゃんとイリスは全部僕のとてわからせる」

指は速度を落とさないどころか、吹いたばかりで敏感になっているそこを、今度は指の腹で覆って、ぷるぷると揺すりはじめた。逃げ場がもつとなくなった。

「ひあっ♡ もうむりだよおっ♡ ゆび、とめてえ！」

「ううん、まだ懲らしめないと。まだわかってなさそうだから」

「わかって、るぅ……っ♡ 本当に、もうみせない、からあ♡」

「ん、じゃあもう一回イクイクして見せて？」

ナカに残っていた指がもう一度奥を押し上げて、腰から上が全部持っていかれる。

「んおお♡ いぐ、いぐぅッ♡♡」

三度目は、身体が跳ねるだけで声にならなかった。

「はあ……ひい……♡」

やっと指が抜かれたとき、私はもう首を支えるのもやっとだった。

かちや、と金属の音がした。
顔を上げて、息が止まった。

ぶるん♡と取り出されたそれは、彼の身体の大さきに見合ったものだった。太くて、反っていて、先が濡れて光っている。

「ひっ！ それだけは……！」

挿入だけは、今まで避けてきた。私が本気で嫌がると、彼はいつも「わかったよ」と言って引いてくれた。許してくれていたのに。

彼は無言でそれを持って、私の脚のあいだに寄せ、開かされたそこに、ぬるゝ♡っと塗りつけた。

「ひ、あ……っ」

熱い。押し当てられているだけで、腹の底が勝手にきゅっ♡となる。テラテラ光る先端が入口をなぞるたび、恐ろしいのに、身体だけが待っているみたいだ。

「ゆ、るしてえ、おねがい……」

彼はしばらく黙って、それから、少し笑った気配がした。

「じゃあ、お口でもらおうかな」

「……口で？」

「そう。許してほしかったら、お口で僕をイかせてみて」

「は、はい……」

私はふらつく手を地面について、目の前に来たそれに、顔を寄せた。

大きすぎてどうしていいか分からない。とりあえず、先のほうにそつと舌をつけた。

初めて味わう雄の味が広がった。

「んっ……♡」

「どうしたの？」

髪を撫でる手は、さっきまでの手と同じとは思えないくらい優しかった。優しいのに、許してもらえる気配はまったくしない。

意を決して、口に含んだ。

「んぐっ♡ むう……♡」

「うん、じょうず。そのままゆっくり動かして」

言われたとおりに頭を動かして、出し入れする。口の中でますます硬くなっていくのがわかる。味が濃くなっていく。顎が疲れ

て、涙が滲んで、それでも止めたら許してもらえない気がして続けた。

「んうゝ♡ んっ……♡ んっ……♡」

そのうち、先端がびくつと跳ねるのを感じた。

「はあ、出すよ——こぼしたらまんこにブチ込むからな」

また、低い声だった。

飲むしかない、と身体が理解した。

続いてビュクビュクツと解き放たれた液体は、想像よりずっと勢いがあって、エグみがあって、喉に当たった途端にえびきそうになった。それでも必死に飲みこんだ。二度、三度と押し寄せて、最後の一滴まで出し尽くしてから、やっと解放された。

「ん……偉かったね」

さっきまで自分のものを啜えていた口だというのに、彼は氣にもせずにキスを落として、そのまま抱きしめてきた。

「……ちよつと、大人気なかったかな」

「……ちよつとじゃない！　ばか！　怖かった！」

「ごめんごめん」

いつもの声だった。やっと普通に返ってくれた、と思つたら、緊張が切れて、涙が出た。彼はそれも黙って拭いてくれた。

その夜、ベッドで考えた。

何なんだろう、あの人は。トップヒーローなのに、こんな最下位の悪役にあんなに構って。怒るところも変だし、謝るところも変だし、変なことだらけだ。

そして、一番変なのは。

嫌じゃない、ということだった。

それが、一番始末が悪かった。

三章 なんでも分かる

その日私は、解体待ちの古いビルの資材置き場に、掘り出し物の油圧シリンダーが眠っているという話を聞きつけて、工具袋を担いで忍びこんだ。

床が抜けたのは、奥の通路を進んでいるときだった。

メキッ……、と音がして、次の瞬間には落ちていた。背中から硬いものにぶつかって、息が止まって、それから何度か跳ねて、止まった。

地下のピットだった。頭の上、四メートルくらいのところに、抜けた床の穴が四角く光っている。壁は打ちっぱなしのコンクリートで、掴めるものが何もない。

「……っ、う」

立とうとして、右足首に体重を乗せた瞬間、視界が白くなった。だめだ、これは無理だ。

工具袋は落ちる途中でどこかへ行った。携帯は——あった。あったけど、画面が蜘蛛の巣みたいに割れていて、何を押しても反応しない。

「うそでしょ」

解体待ちのビル。人は来ない。私がここに入ったことを、誰も知らない。ガレージに帰らなくても、心配する人はひとりもない。

叫んでみた。何度か叫んで、喉が痛くなって、やめた。

膝を抱えて、コンクリートの壁にもたれた。

どうしよう。

（このまま……死ぬのかな）

そう思ったら、涙が出そうになって、慌てて奥歯を噛んだ。

上から、音がした。

風を切る音と、着地の音。四角い光が影で塞がって、次にはもう、その影は私の目の前に立っていた。

「カシエル……、なんでここに？」

「大丈夫？」

しゃがみこんだ彼が、私の顔を覗きこんだ。いつもの、にこにこした顔だった。

差し出された手を掴むと、あっけないほど簡単に助け起こされ

た。

「あ、ありがと。大丈夫だけど……何でわかったの？」

「なんでも分かるよ、君のことは」

「……なんか、怪しいけど」

「いいからいいから」

これは絶対、はぐらかされた。けれど、問い詰める前に、彼はこう言った。

「それより、早く手当てしないと。捕まって」

「えっ、わっ！」

膝の裏と背中腕が入ったと思ったら、身体が浮いた。

跳んだ。

風が下から吹き上げて、視界が一気に開けて、崩れかけたビル

の屋根が足の下を流れていく。街の明かりが遠くにあった。抱えられている腕はぴくりとも揺れなくて、私はその胸元にしがみつくしかなかった。

わかっていたつもりだった。彼はトップヒーローで、私なんかとは全然違う場所にいる人だって。なのに、こうして風の中で抱えられていると、それが今さら身体に染みてくる。

二度目の着地の衝撃が抜けて、そつと下ろされた。

「ここ、どこ？」

「僕の家」

顔を上げて、固まった。

門があった。門の向こうに前庭があって、その奥にまだ大きな

建物がある。

「え？ や、やだ……！」

「なんで」

なんで、じゃない。前に脅されたときのことが一瞬で蘇った。歓迎するよ、もっと気持ちよくなれるのにね、と笑ったあの顔。こんなところに入ったら、何をされるかわかったもんじゃない。

「大丈夫だって」

「信じられないよ！」

「さすがに何もしないよ、怪我人に」

それだけで済ませて、彼は有無を言わず私を抱え直した。

連れこまれた部屋のソファに下ろされて、私はやっと自分の右足を見た。

「ほら、怪我見せて」

「うん……」

つなぎの裾がめくれた足首が、赤黒く腫れていた。目にしたことで、痛みがずきりと戻ってきた。

彼は救急箱を持ってきて、床に片膝をついた。ヒーロー装束のまま、私の足を膝に乗せて、冷やして、消毒して、包帯を巻いていく。指の力の加減が、驚くほど丁寧だった。

三号機を粉碎した手と同じ手だとは思えない。

「……ありがとう」

「いいんだ。僕の担当悪役だからね」

その言い方が引つかかって、私は口を開いた。

「……おかしいでしょ、それ」

「うん？」

「そもそも、なんで私の担当があんたなの。最低ランクの悪役にトップヒーローがつかなくて、どう考えてもおかしい」

ずっと聞けなかったことだった。聞いたら答えが返ってきてしまうのが怖くて、暇なの、で片づけてきた問いだ。

包帯を留めた彼が、顔を上げた。

「本当にわからない？」

「え……なに？」

顔が近づく。

「好きだからだよ。前も言っただけ」

確かに言われた。あのときは往来の真ん中で、私は「うそつき」と言って逃げた。

今日は逃げ場がなかった。足も動かないし、目も逸らせない。

「な、なんで？」

「好きに、理由がいる？」

いる。いるに決まってる。

だって彼は、この街のみんなが好きな人だ。写真を撮られて、手を振って、拍手をもらって、それが当たり前前の場所に立っている人。なんでも持っている人。

（そんな人が、なんで私みたいな底辺の悪役に……？）

「……信じられないよ」

声が掠れた。

彼は少しだけ困った顔をして、それから、包帯を巻いたばかりの私の足首に、そっと手を添えた。

「どうしたら、信じてくれるかな」

窓の外で、庭の木が揺れる音がした。

「……そんなの、わかんない」

やっと出たのが、それだった。信じ方なんて習ったことがない。好きだと言われたのだって、生まれて初めてなのだ。

彼は何故か、少し嬉しそうに笑った。

「じゃあ、信じるまでこうして追いかけるしかないね」

何でもない声で、とんでもないことを言う。

逃げてても無駄だと言われたのと、同じだった。どういう訳か地面の下にいた私まで見つけ出す人だ。逃げられる場所なんて、たぶんこの街のどこにもない。

——怖いはずなのに。

もう怖いと思っていけない自分に、気づいてしまった。

「とりあえず、今日は泊まっていきなよ。その足で、ひとりじゃ不便でしょ？」

「やだってば！ 絶対帰る！」

「部屋はいっぱいあるよ？ 好きなの使っていていいから。ああ、もちろん僕の部屋でもいいけど」

「怖い怖い！ お願いだから帰らせて！」

押し問答の末、どうにかガレージまで送ってもらった。折れてくれたのは、私が「明日も来ていい」と言ったからだ。……言わされた、が正しいけれど。

それから、彼は本当に毎日来た。

現場があってもなくても、夕方になるとシャッターの前に立っている。包帯を替えて、腫れの引き具合を見て、冷やして、それだけして帰っていく。その間は、本当に手を出してこなかった。

(……この人、どうしてここまで?)

聞けないまま、日が過ぎた。

一度だけ、彼の視線がガレージの奥で止まったことがある。布をかけたままの、三号機の残骸の上で。

「あれ……まだ、持ってたんだ」

「べ、別にいいでしょ！ 気にしないで」

なんだか気まずくて気をそらすとする私に、彼は「うん」とだけ言って、それ以上は聞かなかった。……帰り際、もう一度だけ、そっちのほうを振り返っていた気がするけど。

足が使えないぶん、手だけが暇だった。

それで、あるものを作った。踵から膝までを支える、添え木みたいなフレーム。今度は動力なしだ。バネと蝶番だけの、電気が通っていないやつ。踏みこむと沈んで、蹴り出すときに押し返してくれる。要するに、足の代わりに踏ん張ってくれる杖みたいなものだ。

組み上がったところで、手が止まった。

——自分に使うようなものは、僕が来てからにして。いい？

あのときの低い声が、耳の奥で鳴った。わかった、と言ったのは私だ。

だから翌日、私はそれを膝に乗せて、彼が来るのを待っていた。

「なにそれ」

「……見てて」

留め具を締めて、立ち上がる。体重をかけると、バネが沈んで、ゆっくり押し返してくる。いい。設計どおりだ。痛みが来る前に、力のほうが逃げていく。

ガレージの端から端まで、自分の脚で歩いてみせた。

「ほら！」

振り向いて、胸を張った。

彼は私の脚をじっと見ていた。それからしゃがみこんで、フレームの継ぎ目を指でなぞった。

「……ここ、締めきつてないんだ」

「うん。締めると、力が全部足に返るから。逃がしとかないと、

腫れてるとこ潰しちゃう」

何気なく言ったことだったけれど、彼が顔を上げた。何かを見つけたような目だった。

「うん。やっぱり君は、こういうのだよね」

「？」

「ううん。こっちの話」

そのときは、意味がわからなかった。

予告編

体験版の本編は、ここまでです。

ここから先は、完全版の中から。
どれも、続きは本編でどうぞ。

四章 身体に聞いてみようか より

その日は、朝からずっと調子が悪かった。

起き抜けに工具箱を足に落とした。組み上げたばかりの制御基板は、通電した瞬間に焦げた匂いを出した。半月かけた設計に、根本の計算ミスが見つかった。何をしてもうまくいかない日というのは、あるのだ。

そういう日に限って、現場に出た私は、また失敗を重ねた。

十七号機の前脚が段差を踏み外して、四本まとめて横倒し。私は操縦席から投げ出されて、通りの水たまりに、顔から突っこんだ。

びしょ濡れで顔を上げた先に、通行人の輪があった。

「ぷっ……」

「またあの子だ。今日はロボごと転んでる」

「悪役って、あれでやっていけるの？」

笑い声。スマホ。頬を伝う冷たい水。

「待ってれば、またカシエル来るんじゃない？」

「来る来る。あの子のとこだけ、毎回来るもん」

「……まさか、本気だったりして」

「なわけないじゃん。ヒーロー様の遊びだよ」

どっと、笑いが起きた。

遊び。

——毎晩、自分で自分に言い聞かせてきたのと、同じ言葉だった。同じはずなのに、他人の口から聞かされたそれは、比べものにな

らないくらい深く刺さった。ほら見ろ。誰が見たってそうなのだ。世界中が正解を知っていて、勘違いしかけていたのは、私ひとりだけ。

目の奥が熱くなる。だめだ。こんなところで泣いたら、本当に
おしまいだ。

そこへ、影が降ってきた。

「――本気ですよ、僕は」

着地の音より先に、声を通った。

涼しい、いつもの外向きの声。それなのに、通りがしんと静
まった。

「こういった部外者の憶測は活動の妨害になりますので以降控え
てください。……さあ、避難を」

そう言われて、人垣は気まずそうに散っていった。倒れた十七号機を片手で起こして、通りの端にそっと寄せる。何もかもが、完璧な手際だった。やっぱり、住む世界が違うんだ。そう、思った。

「イリス。怪我は——」

「……もう、私にかまわないで」

差し出された手を、見られない。

「からかうのは、もうやめてよ。……私だって、暇じゃないの」

「からかう？」

彼は、心底わからないという顔をした。それから、人垣の消えた通りの先へ、すっと目をやった。

「……もしかして、信じてるの。あんなやつらの言うこと」

声が、一段低くなった。

「わかった。すぐ始末してくるから、そこで待つて——」

「や、やめてよ！」

止めた自分の声が、裏返っていた。冗談の顔じゃなかった。放っておいたら、この人は絶対に行く。

もう、限界だった。転んだことも、笑われたことも、怖くて聞けずにいた答えを他人に先に言われたことも——こんなときだけ低い声を出す彼に、まだ縋りたくなっている自分自身も。全部、ぐちゃぐちゃだった。

「もう、うんざりなの！ カシエルなんか、きらい！ もう来ないでよ！」

八つ当たりなのはわかってる。でも、もう取り消せないし、今

は取り消したくない。

沈黙が、長かった。

「……きらい？」

聞き返した声は、静かだった。静かなのに、空気が一気に冷えた。

「ふーん……俺が、きらい？」

俺——。まただ。

笑っているようで、笑っていないかった。

まずい、と本能が鳴った。後退る。一歩ぶんの距離は、一歩で詰められた。壁が背中当たる。顎を、掴まれた。

「そんなに——俺のことが、信じられない？」

低い声に、目の奥の熱。怒っているのか、傷ついているのか、

わからない。彼は続けた。

「じゃあ——イリスの身体に、聞いてみようか」

五章 恋人を迎えに より

「まさか、こっちにいい男でもいるのか？」

「——ああ、いるよ」

肩に、重みが乗った。

大きな手が、私の肩を抱いていた。いつからそこにいたのか、全然わからなかった。音も気配もなかった。

「ひ……！」

男の顔から、にやにや笑いが剥がれ落ちた。

「な……トップヒーローの、カシエル……!!? なんで、こんなところ……」

「恋人を迎えに来た」

「恋人……!？」

違う、と言うべきだった。恋人になった覚えはない。答えだつて、まだ返していない。なのに。

「イリス」

名前を、呼ばれた。

それだけなのに、静かに咎められているのがわかって、私は口をつぐむしかなかった。

「じゃあ、そういうことだから」

彼からにつこり冷たい笑みを向けられて、男は一步下がった。

彼は私を抱え上げる。部品の袋が、いつの間にか彼の手に移っていた。

「ちよ、まって……！　わっ！」

地面が、遠くなった。

【中略】

——空気が、変わった。

「ゆっくり開かせようと思ってたけど、気が変わった。他の男にやるくらいなら——もうここで、俺のだってわからせる」

「ちがつ、ついていくなんて一言も——んんっ……！」

口を塞がれた。

噛みつくみたいなきスで、言い訳ごと飲みこまれる。そのあいだにつなぎの前を開かれて、袖から腕を抜かれて、下着も、全部。素肌が空気に触れて震えた瞬間には、もう大きな手が身体中を

這っていた。

胸を掴まれて、先端を摘まれて、こりこり♡と転がされる。もう片方の手は、迷わず脚のあいだへ。慣らすというより、暴くみたいな触り方で。

「んっ♡ ぐっ♡ ま、って、らんぼう……っ♡」

「うん、今日はぐちゃぐちゃにする——イリスが俺以外のこと、わかんなくなるように」

番外編　いい夢を見た気がする　より

結婚式からしばらく経った、ある朝の話。

目が覚めたら、隣に、美しすぎる男が寝ていた。

朝の光の中で見ると、本当に出来が違う。まつげが長い。鼻筋が通ってる。寝ていても姿勢がいい。世界で一番強くて、世界で一番顔がよくて、この街の全員に愛されている男。

(……信じられない。この男と、私が……)

思った瞬間、昨夜の記憶が一気に戻ってきた。散々泣かされて、数えられないくらいイカされて、ナカに出されて、めちやくちやにされて、最後は意識ごと落ちた。腰の奥に、まだその名残が重たく居座っている。

(~~~~!!)

頭がかーっとなつて、私はひとりで布団の中でワタワタした。何度目でも慣れない。慣れる気がしない。だいたいなんで私はこの人の腕を枕にして……いや脱出しよう、顔を洗おう、とにかく一回冷静に――

「かわいいな、朝から」

「きゃっ！ お、起きてたの!？」

「ああ、まあな」

……ん？

(あれ。口調が、またいつもと違う……)

低くて、掠れてて、甘ったるい。この声を私は知っている。だからこそ、嫌な予感しかしなかった。この声は、いつも、ろくな

ことにならない。

「た、狸寝入り？ 性格悪い……」

「そんなの、今更だ」

確かに今更だ。こいつの性格が悪いことは、とつくの昔にわかってた。

「わっ、ちょっと……！」

気づいたら、上に乗られていた。両脇に腕をつかれて、朝日を背負った影の中に閉じこめられる。

「や、やだ、またあ……？」

「お前がかわいいからだろ」

「そんっ、んう……♡ んん♡♡」

問答無用でキスされた。恥ずかしくて思わず顔を背けたら、低

い声が落ちてきた。

「逃げんな」

顎を掴まれて、戻されて、もっと深く。ぬろゝ♡つと分厚い舌が入りこんできて、口の中を全部犯されていく。齒列も、上顎も、縮こまった私の舌も。

「ふう、んう、んん♡」

（あさから、こんなキス……♡ あたま、とけちゃう……♡）

寝間着なんて、いつの間にかはだけられていた。というか昨夜のあれこれで、最初からほとんど機能していなかった。素肌に大きな手のひらが直接触れて、腰が跳ねる。

ずり♡と、脚のあいだに固いものがあてがわれた。

「ひゃ、やだ、入れないでえ……！」

「入れるに決まってるだろう？ イリスが、ここにいて」

番外編 史上最強のヒーロー様 より

例によって、朝からうちのヒーロー様に襲われていた。

結婚してから、私の朝はだいたいこうだ。目が覚めたときにはもう寝間着が行方不明で、今朝は特にひどい。膝の裏に大きな手が掛かって、身体をふたつに折り畳まれて、真上から体重ごと打ちつけられている。

ぶちゅっ！　ぶちゅぶちゅぶちゅっ♡

「お、おおお♡　も、やらあ♡　とまってえ♡」

「んー？　なんで？　こんなに気持ちよさそうに締めてるのに」

「ぎもち、よしゅぎ、だから♡」

「ふふ、ならいいでしょ？　もっと気持ちよくなる？」

「ひ、これいじよ、らめえっ♡」

ばちゅんっ♡ばちゅんっ♡ばちゅんっ♡

言ってるそばから、打ちこみが重くなった。折り畳まれた身体は逃げ場がなくて、いいところに全部当ててくる。彼は私の身体の気持ちいい場所に私よりずっと詳しい。

（おく♡ おく、ばっかり♡ あさから、こんなにされたら、こわれちゃう……♡）

「ほら、もっと足開け」

「ふあっ♡」

低い声と一緒に、ますます体重をずっしり掛けられた。膝が胸につくくらい押しこまれて、見上げた先には、欲情に濡れてとろんとした目。

(……モードも変わってるし。ヤバイ……！ 本気でされちゃ

う……！)

「あ、や……♡」

——ブーブー。

そのとき、枕元で、無粋な振動音が鳴った。

腰が、止まる。

彼の端末だ。……この人の端末は、めったに鳴らない。鳴ったとしたら協会からで、協会が彼を呼ぶのは、よっぽどの日だけだ。

「……チッ」

今、舌打ちした。街のみんなが見たら卒倒するだろう顔のまま、彼は長い腕を伸ばして、繋がったまま端末を取った。

「何か？ 取り込み中です」

声だけは、外向きの完璧なヒーロー様だった。

（ちよ……抜いてくれないの!?)

抜いてくれないどころか、ゆっくりと、中をずちゆずちゆ♡とかき回されはじめた。

「ふ、う……♡」

慌てて両手で口を押さえる。彼はそんな私を見下ろして、通話が続けながら、にっこり笑った。ひどい。

「——地球外生命体……?」

物騒すぎる単語が聞こえて、一瞬で血の気が引いた。のに。

「……ちなみにそれ、僕じゃないと、だめですか?」

（きいてる場合か!!）

【中略】

「大丈夫だって。それより、帰ったら続き、ね？」

「う……♡」

ちゅ、と今度は優しいキスが落ちてきた。おでこがくつつく距離で、綺麗な目が私を覗きこんでいる。

「——続きでも、なんでもしてあげるから。絶対、帰ってきて」
こんなこと言うつもりなんて、なかった。でも、口が勝手に動いていた。

沈黙が、三秒。

「……ッ♡ 言っただな？」

体験版は、ここまでです。

ここから先は、『きらい』と言ってしまった日も、逃げようとした夜も、
花嫁にされてからも、寝ぼけた朝も、討伐から速攻で帰ってきた日のご褒美も、
ぜんぶ最後まで書いてあります。

完全版は本編（序章＋全七章＋彼視点の終章）に、書き下ろし番外編2本を収録して、約6.5万字。
最後はいちゃラブハッピーエンドです！

▼ この続きは、完全版で

DLsiteにて発売中です。サークル「なぎさの妄想部屋」、または作品番号RJ01694865で検索できます。

https://www.dlsite.com/girls/work/=/product_id/RJ01694865.html

気になったら、お気に入り登録だけでもどうぞ。